

イケメン・デカ玉・つまようじ2



玉子王子 著

一章 盗賊対ただの農婦、金蹴りで農婦の圧勝

街道を行く馬車に乗った女たち、村人らしい質素なスカート。

一人だけ男で、粗末な剣を抱えて座っている。

その上を、ドラゴンというか、ワイバーンが空を行く。

見上げて、ため息をつくイケメン。大助は転生者。

「きゃ、おっかい」

「やっぱりアレは大きいのがいいよねえ」

目を輝かせ、空を指さす女たち。ワイバーンの股の間にはブランブランと男の証が悠然と揺れていた。

ドラゴンが爬虫類なのかはともかく、それ系の生物なら男性器など体の中にあると思えるが、魔物は体内に魔力があるため、男性器を中に収めておくと精子の製造に問題が出るという。

ともかく、遙か頭上を行くのに、ブランブラン見える立派なモノにため息をつく女たち。

これ見よがしにつきつつ、ちらちらとイケメンを見る。

「あー、ご立派ねえ」

「ほらダイスケ見てよ」

「あ、そういえばダイスケのってどのぐらいだっけ？」

「もう、知ってるくせに。こんなんよ、こんなん」

小指を立てて反対の手で掴み、第一関節から上だけを出す女。

「しかも超重装備！」

「ごっついよねえ、あんたの皮！」

「お、お前ら……」

「あら、怒った？」

「暴力振るうつもりじゃないでしょうね」

「やだ、男の人に暴れられたらどうしようもないよ」

「そうよねえ、私たち女の子ばかりだもん」

「いやいや、大丈夫大丈夫。だって私たちには、必殺のあれがあるもん」

「え？ なになに？」

「やだ、もう、知ってるくせに」

「わかんない、女の子だもん」

ニヤニヤと唯一の男を見る女たち。

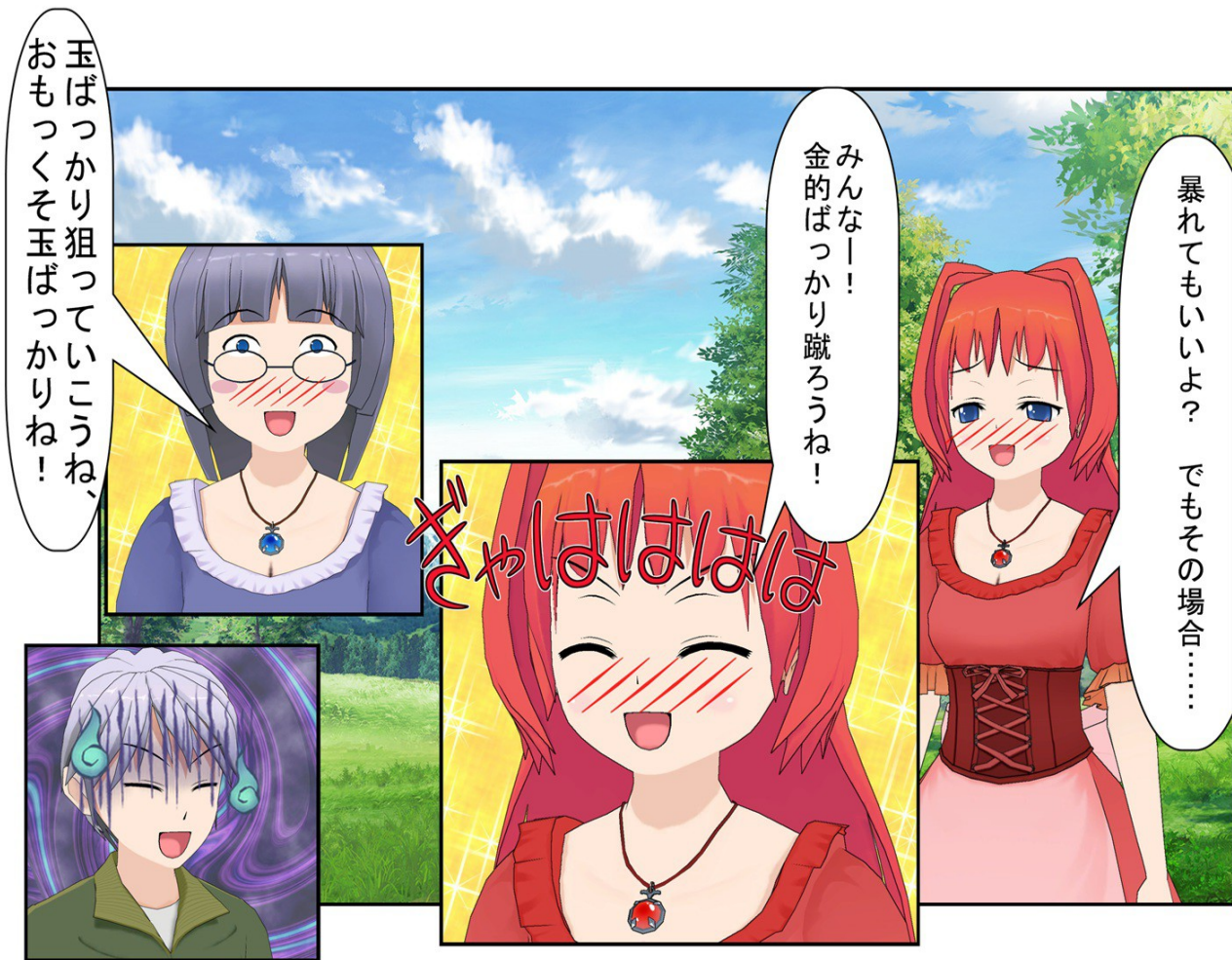
顔を赤らめ、巨大な玉と極小の竿——というほどではないが——を縮み上がらせる。

——こいつら、こんな話ばかり……

「怒って暴れたりしないよね、ダイスケ」

「暴れてもいいよ？ でもその場合……みんなー！ 金的ばっかり蹴ろうね！」

「玉ばっかり狙っていこうね、おもっくそ玉ばっかりね！」



「女の子様に逆らうやつには、いたいいたい金ののお仕置きが待ってるのは当然よねえ？」

「あ、暴れるわけないじゃん。俺、みんなの護衛に来てるんだし」

「だよね」

「そうそう、女の子に寄ってたかってタマタマばかり狙い撃ちされる状況でイキれる男なんているわけないもんね」

「ポーションもってるから皆遠慮なく玉潰すからねー」

「一番安い、水より安い玉再生ポーション」

効果の高い魔法薬を作る時の副産物として生まれるほぼただの水と変わらない液体。

まあ擦り傷程度には効く。

魔法屋にピンを持っていけばタダ同然の値段で売ってもらえる。

ばんそうこう程度の意味合いしかない。

ただし、このポーション、なぜか男性器にだけは目覚ましい効果を上げる。玉が潰れようが竿が切り落とされようが、一瞬で再生させてしまうのだ。

そのため、この産廃に極めて近い安いポーションは身体再生ポーションと大げさな名前と呼ばれていた。

が、まずその名で呼ぶものはいない。

一番の顧客である女たちは「玉再生ポーション」と呼んでいる。

死んでも生き返るし、どんな怪我也時間経過で治る世界だが、さらにそのポーションまであれば、もう女たちが急所攻撃を遠慮する理由は全くない。

自分たちは同じ攻撃を受けないというのも大きな理由であるが。

潰れたら終わりの世界なら怖くて急所攻撃などおいそれとできない優しい女たちが、治るならば軽い喧嘩でも玉を潰しに来る。

——ヤベえんだよこの世界の女ども。転生して一年ちょっとだが、うんざりするほど玉蹴り潰されてきてるし……

馬車の上で胡坐を組む大助。股間を両手で庇う。

その動きに、パッと顔を明るくする女たち——まあずっと笑えばなしではあるが。

「あ、見てみて」

「きゃー、金的ガード！」

「男でしょ、もっと堂々としなさいよ！」

「いやいや、これ以上男らしい姿はないでしょ」

「そうよねー、だって女の子ならこんな格好絶対しないもん」

「守る必要ないよね、私たちのここは」

「無敵マンマン」

大助は肉体は一七歳、中身は前の人生を入れて四一歳といったところ。

周りの女たちも二〇前だが大体大助より少し上で、結婚が早いファンタジー世界なので主婦ばかり。

今大助が住んでいる——というか他所に行く金がないので半端仕事をして置いてもらっている——バテアの村の女たち。村の周囲にある中小の町の一つに向かっている。

作物を売るためだ。

女ばかりというのも不用心な気もするが、それほどでもない。

丘の陰から、五人ほどの男たちが出てくる。

後ろから二人。

囲まれた。

「おらっ！ 降りろ女ども！」

薄汚れた皮鎧に、槍や長剣の男たち。見るからに盗賊。顔を布で巻いて隠している。

「きゃ！」

「乱暴しないで！」

顔を引きつらせつつ、頬を緩めて馬車から降りる女たち。

遠目で、声だけ聴けば怯えているが、近くにいる大助にはそれが演技だとわかった。笑いをこらえ、降りていく女たち。

「ダイスケは隠れてて、油断させるの」

小声。幌のある馬車なので、荷物の間にサッと伏せることはできる。

——なんか笑ってるが、大丈夫か？ 生き返るとはいえ……

「乱暴しないでください！」

「何でも言う事聞きますから……」

怯えた顔の女たちに、盗賊の男たちは頬を緩ませる。

「へへへ、女ばかりとは不用心だな」

女五人。

盗賊らは七人。

ニヤニヤしながら集まってくる。

「お頭、いいですよ」

「もちろんよ、俺は……そうだな、お前だ。一番美人だからな」

「やだ、そんなに美人かしら？」

「おお、いい女だぜー、デカいのぶち込んでやるからなー」

真昼間から盛る男たち。

隠れていた丘の陰に移動しようとする。

五人が女たちに一人ずつ、あぶれた二人が馬車に向かい、同じく丘の陰に隠そうとする。仲間たちの後で、当然やる気である。

一方、大助。

馬車の荷台は荷物が落ちなければいいだけだ。そのため側面は箱状というより籠状であり、隙がある。

隙間から外を見ることができる。

——まずい、二人も近づいてきてる……

というか、**ザコ盗賊一人でも手に余る**底辺戦士大助である。

女たちが動く。

その前から、チラチラと男たちの股間をうかがっていた。

股間は男にとっては真っ先に守りたい場所だが、下手に守ると動きに支障が出るし小便時などに不便である。

そのため、男らの最も守るべき場所は長方形の前垂れのようなものでカバーされているだけだ。

目くばせし合い、スッと音もなく手を伸ばす村の女たち。

前垂れを横にずらし、膝。

跳ね上げる、男の肉塊、鍛えようがない人体最弱の急所に。

「おぐっ」

「あがっ」

「ふぐっ」

「ほごっ！」

「ぐむっ！」

ほぼ同時に、くぐもった叫びを挙げ、腰を引く五人の盗賊たち。

「ちょ」

「なん……」

「お、お前ら」

「玉っ……」

股間を押さえ、目を見開く。汗が噴き出す。武器を取り落とす。

槍を持っていた者たちはサブの武器である長剣を、長剣や斧の者たちは短剣を抜こうとするが、すぐに腕を女たちに抑えられる。

押さえつつ、さらに膝蹴り。

当然、狙うは股間一択。

「あがっ！」

「ちょっ！」

「やめ、そこはやめてっ！」

殺されてもすぐ生き返るから平気とはいえ、痛みはあるし荷を奪われるのは大損だ。

彼女らはただの農村の主婦で、別に訓練しているわけでもない。

そのため初撃時は緊張もあったが、二発目三発目となるともう満面の笑みである。

「そらそらそらっ！」

「あはは、もう終わりね！ タマタマやられた男の弱さはよくわかってんのよ？」

「急所攻撃！ 急所攻撃っ！」

「女は黙ってキ○タマ潰しね、やっぱり！」

軽くやられても飛び上がる股間へ、渾身の膝金蹴りである。

次々と泡を吹いて崩れる盗賊たち。

「こ、殺す！」

残りの二人の盗賊。

震えつつ、剣を振り上げる。

役得で目の前の女たちを犯すつもりで緩んでいた股間が、ギョングョに縮み上がっていた。

それが見えるわけでもないが、もはや余裕でニヤニヤする女たち。

「逃げたほうがいいよ？」

「私たち、あんたたちを殺したりしないよ？ 皆で金的ばかり狙って蹴って、気絶したところを捕まえて役所に突き出すよ？ そうしたら鉱山で一〇年ぐらい食らうんじゃない？」

殺せば近くの拠点に復活するだけで、逃げられてしまう。

だからこういう盗賊の類はできれば殺さず、役所に突き出す。役所は彼らを様々な労役に駆り出して利益を上げるので、報奨金を払ってくれる。

じりじりと距離と詰めつつ、楽し気な女たち。

「ビビってるよあいつ！」

「タマタマやっちゃうよやっちゃうよ？」

「男って怖がるよねー、金ちゃん攻撃だけは！」



「今は四つのタマタマが、すぐにゼロ個になるんだー、悲惨な話ねー」

「でも、こっちははじめからゼロだから」

「そう考えると大した話じゃないきもするね」

うまく、馬車のほうに追い込むように半円で迫る。

震えながら、知らず知らず内股の盗賊二人。

「ひ、ひ、ひいいい！」

わめき、踵を返す盗賊の一人。

もう一人も慌てて続く。

「ひ、一人で逃げんな！」

武器を投げ捨て、馬車に向けて走る。

その前に、大助が飛び出す。

「おらっ！ こいやコラ！」

「ひっ！」

素手で戦意もない二人に、剣を振り回す大助。

足を止めた二人に、女たちが追い付く。

背後に立ち、足を振りかぶる。

「きんっ！」

処刑宣言とともに、バスッと足を男の太ももの間に振り上げる女。

「はぐっ！」

「ぎゃはは、隙だらけ！」

「ふぐおおおおお」

左右どちらに逃げるか定まらず、開いて立った足の間に女の足の甲が跳ね上がっていた。

ぐりゅ、と自分の肉玉が腰骨に押し付けられて破裂寸前で滑って逃れる音を聞いた気がする盗賊。

「ふんぐううう」

膝を締め、腰を引いてその場に顔面から倒れる。

「ひ、ひいい」

残り一人。

女たちが囲む。

いや、倒れた一人にも、二人が向かう。

足を掴んで仰向けに。

そして股間に足をあてがい、電気あんまの形。

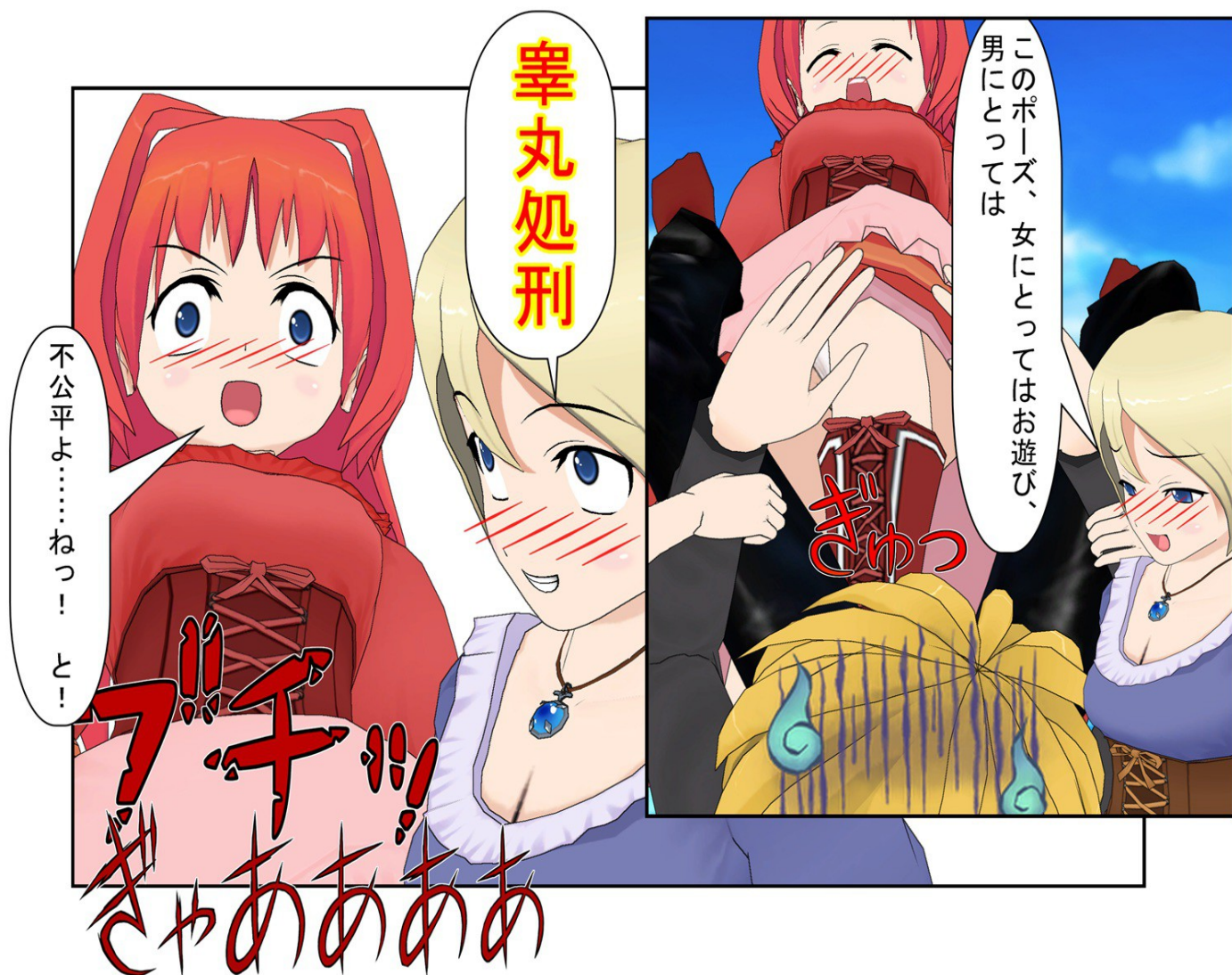
太ももの間に女の足があるのに気づき、その無防備さに顔を真っ青にする。今さっき背後から思いきり蹴り上げてきた女たちが、そこに手加減するわけがない。

「ひいいい！ やめてくれっ！」

「きゃはは、ビビってるビビってる！」

「このポーズ、女にとってはお遊び、男にとっては**睾丸処刑**」

「不公平よ……ねっ！ と！」



「ぐむっ！」

硬い革靴の裏に、やや大きめの玉を二つ確認し、体重をかける女。

男の腰に乗っていくように体を傾ける。

あっさりと盗賊の両辜丸が破裂。

泡を吹く男を見下ろし、へっと頬を軽く緩めて鼻で笑う女。

「あは、去勢完了」

「え、もう？ 男って弱いわねー」

笑う二人。

三人に囲まれた最後の盗賊。

「ちょ、まって、金なら……はぐっ」

「金ならここよね、わかるわかる」

前掛けを持ち上げ、ペンと股間を掌で覆うように叩く。

「ふぐ、はふっ」

「きゃはは、こんなに手加減してるのに何その反応」

「いや、マンマンなら何ともないけど、タマタマには耐えられない威力だっちはっきりわかっててやってんでしょあんだ」

「あは、もちろんよー。我慢できないでしょ？」

「玉の弱さ把握しすぎ！　どんだけ玉責めしてきたのよ！」

「人の事言えないでしょうが！」

「ぎゃはは！　そりゃ女の子がねえ、男と喧嘩するなら、そこ狙うでしょ当然！」

言いつつ、盗賊の背後に回り、羽交い絞めにする。

男特有の痛みに悶えつつ、まだ抵抗する力はある盗賊。

「は、放せ……お前らこんなことしてあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ！」

「ペンペンペンペンペンペンペン」

「急所攻撃急所攻撃！　女特有の遠慮のない急所攻撃だ！　タマタマ攻撃だ！」

先ほどまでの勝つための金的攻撃と違い、もう長く楽しむために最大限手加減している女たち。本気で入れれば一発で戦闘不能、二三発で気絶とわかっている。それでは楽しめないとの判断だ。

「見てみて、こんだけ弱い弱い攻撃なのに、この反応！」

「あはは、女の子様に逆らうからそういうことになるのよ。はっきり言ってあげるけど、あんたら男はねえ、金の玉が弱い！　金の玉がザコ過ぎるの！　だからほかのところがどんだけ強くても、タマタマを持たない女の子様がそこ狙ってきたら勝てないの！　反撃で股間狙っても無駄だから、わかる？」

「むしろ、女の子の股間なんて狙ったらあんだ、おもっくそタマタマに反撃されちゃうからむしろ不利だよ不利」

「やめ、やめてあああ！」

「お、こいつ力強いぞ！　さすが男性様！」

「金の玉は弱いくせに！」

「うぐもおおおお！」

「やっちゃえやっちゃえ金の玉！」

ペンペンペンペンと手首のスナップを生かした連続金カップに膝をバタバタさせる盗賊。

真っ青な顔に汗が噴き出す。と、その目に自分の痛みがわかる人間の姿が映る。

「あ、あああ、た、助けて……やめさせてっ！」

「え、お、俺？」

「あは、ダイスケ助け求められんの」

「私ら蹴散らして、このタマタマ仲間助けてみる？」

「そ、そんな……でも、もう十分だろ？　あとは縛って、役所に突き出せば」

「あはは、そうだよね」

電気あんまの女が大助の肩を叩く。

「確かにこれ以上は無駄だわ、だからさっさと縛る……わけないでしょ！」

スパン、と金カップを払う。

「はぐっ、ちょ……」

「おおおおおおお！　キャン玉あ！」

へこ、と大助の前に回り、腰を引いて股間を押さえる女。

そうしつつ、尻をフリフリと振る。大助も遅ればせながら、同じように踊る。

情けない**金的踊り**をこれ見よがしに真似され、顔を真っ赤にする。

自分は絶対一〇〇パーセント、意思に反してそれを踊ることがない女にやられるのはえもいわれぬ屈辱、見下されているのがはっきりと理解できる。

「ううう、そ、そんな」

「タマタマがあー、痛い痛いなのおおお、キ〇タマダンスでお尻フリフリ、こんなことなら女の子に生まれたかったよー」

「くううう」

インパクトの瞬間の痛みもさることながら、じっくり内臓を締め付けるように広がる痛みも耐えがたい。汗を流しつつ、少しでも痛みがましになるように本能的に腰を動かしてしまう大助。

それを見下ろし、ニマニマ笑う女たち。

一方で、最後の盗賊へのペンペンは止まらない。

長く金的をし続けるために、あえてダメージの少ない軽いカップを打ち続けているのだ。

「そらそらそら、タマタマ痛い？ タマタマ痛い？」

心底楽しそうに顔を覗きこむ女たち。

盗賊が受けている攻撃が、自分たちなら肩叩き程度でしかないのに男だから耐えられないという事実が、優越感をくすぐる。

「やめ、やめっあああああ！」

「女でよかったよねえ」

「それな、それな」

「こんな弱点ぶら下げるとか、**一生罰ゲーム**じゃん」

「ふぐううう」

「あは、ダイスケも痛そう。一回だけなのに」

「カップでタマタマ搦り取るようにスパーンと行ったからね」

「こちとら負けたらレ〇プされてんのよ？ 甘いこと言ってんじゃないっての」

「ま、所詮男にとっちゃレ〇プは他人事だもんねえ」

「私らにとっての金的と同じってか」

「レ〇プしちゃうぞ、とか、レ〇プなんか他人事とか……男って考えれば考えるほど最悪っすねー。こいつら全員タマタマ取ったるか」

「いくつ？」

「八人から二個ずつで十六個没収」

「ぎゃはは、ダイスケのデカ玉も数に入ってるじゃん！」

「ひいいい、お、俺は関係ない！」

「レ〇プと？」

「これはガチで玉抜き案件ですわ」

「ひいいいいい！」

「マジビビってる！」

「ダイスケからまで、取るわけないじゃーん！ ……あは、大人しくしてりゃね」

その後、さんざん盗賊に金的をかまし、数度辜丸を潰しては再生させてタップリお仕置きする女たち。それを急所痛に震えながら見ているしかない大助。

女だけじゃ不用心、などというのはその女たちが**金的を遠慮する場合に限る話**だと股間の痛みに思い知らされつつ。

体験版終わり

この後主人公、闘技場のある街につき、勝手に金的無しルールと思い込んで女剣闘士たちに挑み、当然のように玉集中攻撃。

玉蹴りついでに肉食系女剣闘士らに逆レイプされたり、興奮した女性客ら1000人に延々玉責めされたりと、男の苦しみをたっぷり味わいます。

続きは製品版でぜひお楽しみください